第一条　組版の基本単位をそろえる

文字はそれぞれの文化圏の歴史のなかで生まれはぐくまれて来た。

紙と印刷が発明され、書物がこしらえられるようになった。文字は、印刷物が端物であれページ物であれ、紙の上に配置され、排列される。

したがって、文字の大きさとその単位は、**紙の単位にしたがう**。

ポイントという単位は、紙の縦横の長さが**インチ**（ヤード・ポンド法）である世界のものである。和文組版の単位は紙の縦横の長さが**ミリ**（SI単位系、メートル法）である世界にあわせて、文字の大きさをQ、長さをHでそろえることが出発である。

$$1\mathrm{H}\ (\mathrm{Q}) = 0.25\mathrm{mm} \qquad 1\mathrm{mm} = 4\mathrm{H}\ (\mathrm{Q})$$

※組版の入門書や解説書、アプリケーションソフトなどが仕事の役に立つものかどうかは、単位をどうとらえ記述しているかで判別することができる。

第二条　基準となる点と線を意識する

数値をどこから測るのかということにつねに自覚的でなければならない。

和文組版は正方形のハコを積み上げていく組版である。

文字枠のセンター、行のセンターラインを基準とする**字送り**、**行送り**と、隣りあう文字枠と文字枠との間隔、隣りあう行幅と行幅との間隔である**字間**、**行間**との両方を使い分け、あるいは検算に使えるように習熟する必要がある。

本文組みの基本である**ベタ組み**は、字間ゼロでの文字の排列という字間による定義も正しい し、字送りを字幅と同じにした排列という字送りによる定義も正しい。

行送り方向では、たとえば本文中で文字サイズを一部変更するという場合、行送り指定優先か、行間指定優先か、またはQ行取り指定か、ちがってくる。

第三条　版面と余白との関係は版面優先で決める

版面設計にあたっては、文字サイズと字送り（字間）と字詰め、行送り（行間）と行数でかたちづくられる版面の大きさを優先する。

実際には、版面と余白とを往復しながら決めていくわけだが、紙の大きさから余白を差し引いた残りを版面に、という考えをとってはならない。

こうしないと、字送り（字間）を基本にした組版演算を貫くことができず、図版や写真の食い込む部分や段落最終行などの字送り（字間）が、他の部分の字送り（字間）と食い違ったりして読みのリズムを崩してしまうことになるからである。

※なお、ここで論じているのは空間（紙の上）での組版であり、時間と空間（ウェブや電子書籍）での組版のリズムは異なった階層のものとして考えられなければならない。

第四条　組版演算の基本に習熟する

行長（版面の字送り方向の長さ）
　＝字送り×（字詰め数－1）＋字幅
　＝字幅×字詰め数＋字間×（字詰め数－1）

※ここでいう字幅とは縦組みでは文字の高さ、横組みでは文字の幅のこと

版面の行送り方向の長さ
　＝行送り×（行数－1）＋行幅
　＝行幅×行数＋行間×（行数－1）

※ここでいう行幅とは縦組みでは文字の幅、横組みでは文字の高さのこと

※本文組版ではトラッキング、カーニングは基本的に用いないで、レイアウトグリッド設定での字間（字送り）と行間（行送り）の設定によること

第五条　書体の選択は文字クラスごとに考える

漢字

仮名（平仮名、片仮名）

洋数字、アルファベット

約物

約物は漢字、アルファベットは異なる用字系に属しており、和字専属書体には使わない

洋数字、アルファベットは和字系にあわせず、細いものにすること、という考え方が基本

縦間符・横間符はアルファベットで選んだ書体にすることが基本

第六条　禁則処理では，独り立ちしていない文字や記号符号に対する心配りを怠らない

「人々」の「人」が行末に「々」が次の行頭に来た場合、精算の仕事は禁則処理によって行頭の「を」「人」に書き換えるのか、行末で処理するのか、追い込むのかに分かれる

粗版で処理する場合には「人々」をまとめて追い出すのか、追い込むのかに分かれる

第七条　半角約物は行頭、行中、行末ごとにルールを定める

行頭は固定、行中は浮動、行末は固定（数）を基本にする

約物の区切りの強さの階層は同じだが、同じ階層は同じアキ幅にする

対で考える

約物は行頭、行中、行末ごとにルールを定める

後期〈組版デザイン論〉第14回　20121219

組版設計の要諦5課題

高田手毬
t-mae@kobe-du.ac.jp

組版は、文字を扱う技芸であり、デザインの基礎のひとつである。

私たちはこれまで活版印刷を通して、文字だけでなくさまざまなアキもまた物質であり、大きさを持つことを体感することで学んだ。

これまでの学習をふり返り、要点を復習し、組版の基礎を身につけよう